

## 形成途上の丸山文庫―中村淳介氏に聞く―

「丸山眞男文庫協力の会」メンバー・前国際基督教大学教授 松 沢 弘 陽

東京女子大学が丸山家から寄贈の図書・雑誌・草稿類を受け入れてちようど二年、図書一万七千四百冊、雑誌千五百タイトル一万九千冊の整理・配架・第一次目録作成が終わった。この種の文庫としては異例といえるほど早いだろう。しかも配架にも目録にもユニークな企てが試みられている。この大仕事に総力をあげて取り組まれた、受入・整理を担当する情報管理課のライブラリアンたちの、力仕事・汚れ仕事から文庫構築の「哲学」に智恵をしばるまでの労に心から感謝したい。今回は、中村淳介さんに、図書の配架を中心に苦心の一端をうかがった。

◇ ◇ ◇

――私が一番考えたのは、使いやすい文庫にすることです。自分の蔵書を教員や学生に利用してほしいというのが丸山先生の御遺志だったと聞いています。ですからいかに貴重な蔵書でも「博物館」的に陳列しておくのでは「遺物崇拜」になってしまうし、先生がよく批判され

た「惑溺」じゃないかと思ったのです。

――配架について、ふつうの主題分類によらないで、丸山家の書庫に並んでいた原型を活かすという図書館の方針を示された時は、ライブラリアンとして、「えっ？」という感じでした。しかし、丸山研究という利用のしかたから考えると、「原型保存」の配架にメリットがあると考え、トライしました。先ず丸山先生自身の著作、それに先生についての著作を刊行順に並べ、さらに、先生が最後まで身近に置かれていた「正統と異端」関係、福沢研究関係をまとめる、その後丸山家の三つの書庫に収められていた本を、そこでの配架の記録に従って並べるといふ方式です。これで先生の知的営みが、視覚的にもよくわかると思うのです。

――とにかく初めての経験で、試行錯誤の連続でした。いつも肝に銘じていたのは、錯誤を隠さない、それを率直に報告して先生方の意見をうかがうということです。



——この文庫の利用には、いろいろな仕方があるでしょう。そのための要求がぶつかるところもあると思います。丸山文庫は形成の途上だということ強調したいです。

〔『東京女子大学学報』五五八号、二〇〇一年四月号所収〕  
(文責・松沢)



丸山眞男文庫近影